

〔奨励部門〕

1. 氏名 古川 真人（作家）
2. 年齢 32歳 ※R2.1.6現在
3. 住所 神奈川県



【経歴及び選考理由】

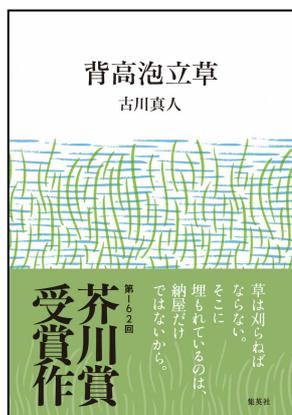
第一経済大学付属高校（現 第一薬科大学付属高校）卒、國學院大学文学部中退。

高校在学中、同校の校是である個性教育を具現化した「パラマ塾（個性の育成を目的としたユニークな塾形式の授業）」の中の創詩塾（文芸サークル）に在籍し、小説を書き始める。高校2、3年生時には、全国高校生創作コンクール短編小説部門の最優秀賞・優秀賞を受賞。

大学では近代日本文学の研究会に所属するが、21歳で中退。その後も、就職やアルバイトを一切せずに創作活動続け、平成28年に発表した「縫わんばならん」で第48回新潮新人賞を受賞し、デビュー。また、同作は第156回芥川賞の候補となる。第2作「四時過ぎの船」、第4作「ラッコの家」も芥川賞候補となり、第5作「背高泡立草」で第162回芥川賞を受賞。

デビュー作から受賞作は、一貫して九州の島に本家がある一族の物語で、これら作品の核には、毎年帰省していた母方の親族が暮らす長崎の小さな島で、氏が実際に目にしてきた情景がある。特に、「草が生い茂り、島が元に戻る。時間の層が埋められる感じを、人物の会話と共に書けないか」という思いで執筆された受賞作は、先祖の家の納屋周辺の草刈りに、親族たちと向かう娘の物語。島の風景や濃密な方言の会話とともに、草刈りに来た家族の意識と、その島にまつわる江戸時代から現代までの出来事が交互に描かれている。選考委員からは「単調な草刈りの合間合間に、時空を超えた形のエピソードが織り込まれている」「同じ場所に確実に存在する異なった時の流れを交錯させるのは、この作者の真骨頂」「古川さんは、今、目の前にいる親しい誰かと、会えるはずもない遠い過去にいる見知らぬ誰かに、等しい距離感で視線を送れる書き手」と高く評価された。

芥川賞の受賞記者会見では、今後の作品の展望について、「島のことだけを繰り返し書くと手癖がつく。自分にとって一番書きやすいものを延々書いてしまうことを恐れている。だから、自分にとって不慣れなもの、まったく未知の他者が現れるようなものを書くこととしたい」と決意を新たにしており、本県を代表するこれからの文学を担う期待の新進作家として、ますますの活躍が期待される。



『背高泡立草』

<主な著書>

- 「縫わんばならん」：第48回新潮新人賞（平成28年）
第156回芥川賞候補（平成28年下期）
- 「四時過ぎの船」：第157回芥川賞候補（平成29年上期）
第31回三島由紀夫賞候補（平成29年）
- 「ラッコの家」：第161回芥川賞候補
（平成31年・令和元年上期）
- 「背高泡立草」：第162回芥川賞（令和元年下期）

（参考）奨励部門：個性的又は創造的な創作活動を行い、将来活躍が期待されるもの。なお、個人にあっては、その年齢が概ね40歳代までの者とし、団体にあっては、その構成年齢が比較的若いもの